

安全衛生の語り部

4

～次世代に伝えたいこと～



(株)レールセキュリティ
代表取締役社長

竹内 千里
TAKEUCHI Chisato

■プロフィール

列車見張専門会社(株)レールセキュリティ代表取締役社長。「日本一安全な列車見張会社」を目指して、社内でゼロ災運動を展開。全国産業安全衛生大会で5回発表。2019年には中災防会長賞を受賞。公認KYTインストラクターとして、研修指導も行う。

安全を追求できる人に

□ ほんじてっていい 凡事徹底

わが社では「行動指針」と「列車見張員心得」、両方に「凡事徹底」を入れている。特にこの徹底が大切だと思っている。「日本一安全な列車見張」を経営理念に掲げてはいるが、何か特別なことをしているわけではない。ゼロ災運動の基本を大切に、コツコツと実践を積み上げているだけである。

私は結婚前に書道家をしていた。人より多く字を徹底して書いたからこそその職業だったと思っている。その経験があるからこそ、職種は変わっても凡事徹底の価値を信じられる自分がいると思う。

わが社では「AKB運動」を展開している。A(挨拶) K(声かけ) B(凡事徹底)である。アイドルグループの明るさにあやかりたく命名した。やっていることは地味かもしれないが、明るい職場風土があれば楽しい活動にもなる。そんな職場環境が人づくりに役立っていると思う。

□ 安全管理とゼロ災運動

私たちの仕事は業務請負いである。現

場環境やルールを与えられた中での作業となる。管理する側は、安全のために設備投資し、ルールを決める。そうしたリスク管理は企業として必要なことである。ただ一方で、ルールを強化することや設備投資だけで安全を確保しようという風潮もある。ルールをきちんと守れる人や設備を正しく操作できる人がいないと安全管理は机上の空論となる。人材育成に焦点をあてたのがゼロ災運動である。だからわが社はゼロ災運動に尽力している。安全管理とゼロ災運動両方そろって真の安全であると思う。

人は完全ではない。完全でない私たちが作業をするために、どんな環境やルールが必要か、管理者は現場の話をよく聞き、現場が作業しやすいルールや環境を整える。自分たちの意見が反映され、より安全に働きやすくなった職場環境になると、現場はルールに従った活動をスムーズに行うことができる。現場をよく知った上でのルールでなければと思っている。

□ 現場経験の大切さ

社員がミスをおかしたとき、叱り、懲

罰を与えるのは簡単である。でもそれが経験上、次の安全につながることはなかった。ミスを起こそうとしてミスする人はいない。私は、社員がミスをしたとき、その事象に関し、まずはじっくり話を聴くことを意識している。その際にとっても役に立っているのが、5年に及ぶ現場見張経験である。ミスの説明を聞く中で、何が原因となり得ていたのかを検証できるのは、現場経験でしかない。現場を知っている管理者だからこそ、社員は本音を話してくれるし、私も彼らの気持ちも分かる。社員との対話を大切にすることで、社員がミスを隠すこともなくなってきた。現在も安全パトロールに参加しているが、どこが危険となりうるかが分かるのも現場経験があつてのことである。今回のミスを次の事故にしないために、社員と一緒に考えるようにしている。

□ 損得より善悪

経営活動の中で「何が正しいか」、いつも悩みは尽きない。判断に迷いが生じたとき、私は「損得」でなく「善悪」を基準とすることを信条としている。

安全はまさにそうである。安全か不安全かは目先の損得が判断を鈍らせることも多い。仕事も社員に無理をさせるようなものの多くは不安全な要素がつきまとうことが多い。だから、そのような仕事は申し訳ないが「NO」と申し上げることにしている。

例えば、わが社で実施している「RS（ルールセキュリティ）研修」「RS会議」「RSミーティング」は全ての業務に優先することとしている。どんな仕事が入っても、これらが実現できないときはお断りしている。その判断に疑問を投げら

れることもあるが、安全・品質を保つための活動をしないことで事故が発生してはより一層相手に迷惑がかかる。

仕事を請け負った現場で、他社のクレーン作業者が安全ルールを守らず作業をしていた状況を目にしたこともある。改善を依頼したにもかかわらず変化がなかったのも、社員を引きあげたこともあった。今後の仕事を考えると勇気はあるが、社員の安全を守りたいからこそその決断であった。

□ 安全への使命感

私たちの仕事はただの「人を送り出すこと」ではない。仕事を請け負うからには、現場の安全に責任をとることが私たち列車見張の仕事でもある。列車見張では、事故が起きそうな場面では電車を急停止させないといけない。その指令を出すには瞬時の判断力と決断力、そして大きな勇気が必要である。私は日頃から、「現場の安全を守るのが私たちの仕事なので急停止ボタンを押すことに躊躇するな。最終の責任は私が取る」と従業員に言い聞かせている。そして、緊迫した場面で、その行動がすぐにとれるように訓練も行っている。社員は自分たちの使命を十分に理解し、仕事にプライドと責任をもって任務を遂行してくれている。そして、そんな社員から日々いろいろなHH（ヒヤリ・ハット）報告があがってくる。日本一の安全を追い求めることには終わりが無いと思う。

世の中も変わり、AI等の技術が発展する中、私たちの仕事も変わっていくことになるだろう。でもいくら技術が発展しよう、最終判断をするのは人間である。社員にはそんな時代でも生き残れるような人材になってほしいと願っている。